

令和元年度 映像部門 総評

高橋委員

この度、東京都の2019年度の広報コンクール（映像部門）の審査・採点させていただきました。

今回の22の応募作品、いずれもレベルが高く、各作品が拮抗しており、採点にもそのことが現れていると思います。

個別作品に対する評価・感想は採点表をご覧くださいとしまして、全体で言うと企画力、それに見合う表現力、構成力の向上がめざましく、以前に比べて背丈に応じたバランスのとれた内容になっていると実感しました。

背丈に応じたというのは、包む荷物によって風呂敷の大きさを選ぶ、という程の意味です。

そして数は少なくなりましたが、シンプルなお知らせコーナー風のインフォメーション番組もあって、それらも「演出」があり、視聴者の興味を逸らさない工夫が感じられました。しかし、全体の傾向で言うとやはり今回の作品はワンテーマに絞ったドキュメントが多かったように思います。もう少し2020のオリ・パラに向けた番組が多くなるかと

思ったのですが、意外と身近な地域史、伝統文化や産業・経済のテーマが多く、地域の広報という観点からは適切なテーマ選択だと思いました。

以上ですが、どの番組もまだ伸びていける要素が十分有り、このまま自信をもって次回も各地域の魅力的なテーマに思う存分挑戦していただきたいと思います。

阿部委員

今年も各区市町村のみなさんの地域の人々への思いを、様々な企画演出という形で見せていただきました。この3年担当させてもらっていますが、年々、そのクオリティがアップしていることを実感します。

伝えるという行為が、なかなか伝わるという結果に結びつかないことは、広報に関わられているみなさんなら、誰もが痛感していることだと思います。同じことを伝えるにしても、それをどういう手法で伝えると、伝わるか。選ばれた作品には、そこに他とはちがうアイデアや、もうひと粘りのアイデアがありました。

荒川区さんの、摺師の川嶋さんに寄り添う距離の近さに圧倒されました。きっと何日も何時間も粘り強く川嶋さんの鼓動や息遣いとともにカメラと一緒に暮らしていたと思いますし、彼の暮らす場所も、その描く作品も、荒川区そのものを描いていて、正真正銘の広報になっているのも感心しました。

他の区でもその地域に住んでいる誰かに密着している作品もいくつかあったのですが、

皆、その人のドキュメンタリーとしては素晴らしいとしても、区の広報としては物足りないものが多く、荒川区はそこが確実に他の区とは一線を画していました。

文京区さんの作品は、区民の皆さんのアイデアを元につくり出したことが何よりじつは素晴らしいです。「そこに暮らす人こそが、その地域そのもの」というオーソドックスな手法ではあるのですが、さまざまなジャンルの人たちが、それぞれの文京での暮らしを「つながり」というテーマで切り取り、美しい撮影と編集で、上質な広報に仕上げられています。

江戸川区さんは、毎年素晴らしいです。防災のPRは世の中に溢れているので、ともすると、つい馴れ合いになって自分ごと化されないものが多いのですが、江戸川区に住む人は誰一人このビデオは、無視できないのではないのでしょうか。区長からのメッセージもご自分の言葉で語られて、本当に頼もしく、僕自身、_他の区の在住ですがつい自分の区の防災体制を調べてしまったほどです。

あとは、常連の葛飾区さんの「カツシカデシカ」。内山さんと照美さんのかけあいで地域のちょっとした情報が、一気にありがたく伝わったり、登場する住民の方たちからも、非常に自然に楽しいその地での暮らしが伝わってきます。他の自治体の皆さんも、プロを起用することが伝達力のレベルが格段にアップすることを実感してほしい

のと、真似て、自分たちの地に馴染みのあるプロの方等の力を借りて広報作品を作っても楽しいと思います。

その他選外の中でも台東区の桜並木の保全に力を注ぐ話や、品川区の野外映画の復活を実現した少女の話もとても面白かったです。

Youtubeをはじめ、世の中に、これだけ発信されているものが溢れている今は、その映像で、何を、誰に伝えようとしているのかをしっかりと考えないと、誰も見てくれない時代でもあります。ただ、一方でそんな情報に溢れている今だからこそ、伝えるべき何かと伝えるべき誰かがはっきりしている自治体の皆さんこそ、その手法を研ぎ澄ます使命があるという自負を持って、これからも楽しんでいきましょう（笑）。